

会 議 録

会議の名称	岩倉市教育振興基本計画推進委員会評価部会（第2回）
開催日時	令和8年7月16日（金）午後1時30分から午後4時30分まで
開催場所	岩倉市役所7階 第1委員会室
出席者（欠席委員） 説明者	土屋委員、益川委員、犬童委員、内藤委員 説明者：教育長、教育部長、学校教育課長、生涯学習課長、こども家庭課長、管理指導主事、指導主事、学校教育グループ長、学校給食グループ長、学校教育グループ主査
会議の議題	(1) 令和7年度の教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況についての点検及び評価について
議事録の作成方法	☒ 要点筆記 ☐ 全文記録 ☐ その他
記載内容の確認方法	☐ 会議の委員長の確認を得ている ☒ 出席した委員全員の確認を得ている ☐ その他（ ）
会議に提出された資料の名称	・ 会議次第 ・ 岩倉市教育振興基本計画推進委員会評価部会委員名簿 ・ 岩倉市教育委員会名簿 ・ 岩倉市教育振興基本計画推進委員会条例 ・ 令和7年度点検評価報告書＜自己評価＞
公開・非公開の別	☒ 公開 ☐ 非公開
傍聴者数	0 人
その他の事項	

審議内容(発言者、発言内容、審議経過、結論等)	
1	開会
2	あいさつ
	土屋部会長：前回と同様に進行させていただきます。時間内に終了するよう努めますので、ご協力をお願いします。
3	審議
	(1) 点検評価 ＜ 基本目標 1－1 から 1－2 について事務局説明 ＞ (2) 質疑 犬童委員：事前質問書を提出させていただいた件でNo.13 についてです。私は全項目すべて重要だと思いますが、今後の岩倉市を考えると外国にルーツをもつ児童生徒というところが一番肝だと思いました。そこで質問と意見の中間のようなものですが、岩倉市が今後 5 年、

10年で他の自治体に先んじて行うべき施策は、子どもたちだけではなく外国にルーツがある人たちとの共生であると考えています。私の学生時代の友人が埼玉県の戸田市や蕨市に住んでいますが、自治体の規模や東京都から近く外国人が多いという点で岩倉市と近いものがあります。ただ、外国人との距離感が岩倉市とは違い、住んでいる外国人の国のルーツや宗教的なものもあるかもしれませんが、岩倉市の方が仲良くやれていると思います。岩倉市は現状も共生できていると捉えることはできますが、子どもたちからの話では非行グループの中の3～4人に1人ぐらいは外国人の子の名前が上がっていて、いろいろな事情はあると思いますが、比率が明らかに高いという印象です。私は岩倉中学校のPTA会長ですが、南部中学校は外国にルーツをもつ生徒が多く、定期テスト結果のグラフを見ると100点に到達しないことも多くて、データの出し方等で中央値を出さないと保護者も心配になり成り立たなくなるのではないかと思います。また、勉強が分からないことが問題行動に繋がっている可能性があるという声も聞かれていて、最低限の読み書きや計算ができ、警察が絡まない一般的な友人との健全な遊びを楽しめているかというところに境目があるような気がします。充実した支援を進めて岩倉モデルのようなものを作っていけたら良いと思います。

土屋部会長：学校における多様な文化背景の学習について、岩倉市ならではのモデル化が進んでいるかというご質問ですがいかがでしょうか。

教育長：今の子どもたちの問題行動の様相は、どちらかといえば特性のある子の比率も外国籍の子どもは若干高めということが影響している可能性はあります。ただ、勉強についていけないことが非行に走る原因になることについて、外国籍の子どもにそういった傾向が顕著であるとは今のところ見ていません。先ほど岩倉モデルと言われましたが、外国籍の子どもが多い南部中学校の授業は岩倉中学校とは全く別の授業スタイルです。岩倉中学校は一斉指導をしても子どもたちが理解する中学校ですが、南部中学校はそうではありません。課題に対して小グループで話し合ったり、コの字型になって議論をしたりする学習スタイルが日常的です。その中で、先ほど学力のことを言われましたが、波がありまして、ときには南部中学校の方が高くなることもあります。外国語と日本語というハンデがありながらも高くなる要素の一つは、わからないことをわからないままにしないということを最初から指導しているからです。そのことで非常にグループ討議が活性化して、お互いの認識を深め合うという対話が盛んな理由は、わからないから教えてほしいと言える子も多く、わからない子をそのままにしてはいけないと思うまわりの子たちも多いです。そういう授業スタイルが成り立っているため、岩倉中学校のような日本語の指導が必要な子が少ない学校にでも本当は応用していくべきことで、それも実は岩倉市の授業デザインでは、ほぼ7校の全校に渡るテーブルにしようとしています。それが学びひたるという概念です。

犬童委員：教育長が言われたように、市内には岩倉中学校と南部中学校の2つしかないので、比較することはやむを得ないと思います。今回の会議に出席するにあたってまわりの人に話

を聞きましたが、親御さんの中にはお互いにないものねだりの気持ちがあります。教育長より両中学校が違うスタイルで授業をされていることをお聞きし、南部中の方は岩倉中のしっかりやってくれるところがもう少しあると子どものためには良いと思い、岩倉中の子は南部中の子が和気あいあいとしていて、そういった活力が子どもにあったら良いという思いがあります。生徒の特徴に合わせて学校ごとに変えているということをお聞きし、理解できましたし、私も今後会った人には、わかりやすい言葉で学校ごとの違いがあることはそういう意図があるということをお伝えしたいと思います。

土屋部会長：岩倉中学校も教育長が言われたように、学びひたるを狙いとする学習をするとさらに学力も伸びるという文部科学省的な研究の成果でもありますので、岩倉中学校はもう少し頑張れる余地があるのかもしれませんが。そういう意味では、南部中の方が遥かに頑張っていると言えるのかもしれませんが。「No. 10 特色ある教育・学校づくりの推進」と、「No. 13 保護者等と連携した外国にルーツをもつ児童生徒への支援体制の充実」が別々のものではなく、今後、次の第2期の計画に活かすためには、この「No. 10 特色ある教育・学校づくりの推進」の中にそういう外国にルーツがある子たちのいる学校がそれを特色としてどのように学校作りをより充実させるかということも必要かもしれません。その授業デザインの部分が教育長の今の説明ではっきりとしましたが、この中では少しわかりにくい感じがしました。外国にルーツのある子たちがいることがネガティブに捉えるのではなく、それは学校にとってはプラスであるというような学校づくりを、岩倉市の場合は必要としているのかもしれませんが。犬童委員の発言により問題がクリアになってきたと思いますが、意識的に知る必要があると思います。内藤委員いかがでしょうか。

内藤委員：中学校の話題になっていますが、私は以前岩倉東小学校に10年くらい土曜日の特別活動に行っていたことがあります。最初は外国籍の子どもたちだけを相手にして日本のことを知ってもらいたいという思いがありましたが、後半は日本の子どもも一緒に入って遊んでいました。そのような中で、いろいろな国の人たちと遊べることを受け入れて喜んでいた日本人の子どもが多くいました。そういうものを見ていると、いろいろな人がいることは大事だと思いました。今、「No. 10 特色ある教育・学校づくりの推進」の中で、自己評価の一部に、「市としてめざす児童生徒像などについて共通のビジョンを持つことができ」と書いてあり、文章としてはとてもいい文章だと思いますが、市としてめざす児童生徒像については、具体的にどのようなことを思い描いていますか。

土屋部会長：ここは自己評価の中で書いている部分ですので、何かイメージがあればお願いします。

教育長：ほぼ国の考えと一緒に、未来を切り拓く子どもということですが、共通のビジョンは、特に先ほど申し上げた授業スタイルについては意識していて、社会的包摂や誰1人取り残さ

ないという感覚を子どもたちも持つということです。明文化されたものは、「確かな知性、豊かな感性、他者を理解して思いやる、健康な体、自分の良さを生かして夢を実現する」というものです。お互いがそれぞれ高め合うという関係性を一番大事に築こうとしています。

内藤委員：「No. 13 保護者等と連携した外国にルーツをもつ児童生徒への支援体制の充実」の方と重複する部分があるということを考えると、岩倉市の特色としてはやはり全体としての割合は少ないかもしれませんが、多様性を大切にすることとも入ってくると思います。決して外国にルーツをもつ人を排除するということもないですし、どちらかということと保護者の見方かもしれませんが、外国にルーツをもつ子どもたちがいるから成績が下がるという問題もありません。子どもはもっと純粋にブラジルやベトナム、フィリピン等の子どもの話が聞けたことを喜んでいて、お互いに理解し支え合えるという多様性を認めるという言葉が入ってくると良いと思いました。

土屋部会長：「No. 13 保護者等と連携した外国にルーツをもつ児童生徒への支援体制の充実」の「日本語指導を中心に日本の文化や学校の決まり等について指導を行い」というところが、おそらく内藤委員の考えとしては表現が少し上から目線で昔風になっているということかもしれません。理解という形でお互いが日本の文化も外国の文化も共通に理解し、お互いが理解し合うことをプラスに捉え、まちづくりや学校の教育ビジョンとしてプラスの方に持っていくということが必要だと思います。問題行動や非行の問題もその子どもを理解する人がいない場合に発生するということが言われていて、理解してくれていないことが親や社会に対しての反抗として問題行動につながるということです。身近に友達や教師のように理解してくれる人が1人でもいることが大事であり、岩倉市ではコミュニティ・スクールも進めていますので地域の人も関わってくる可能性もあります。理解者をいかに増やしていくかということに関して、お互いが理解し合えるような関係性や場が必要だと思います。一緒に活動をする中で得られる経験が増えていくことで、教育活動として特色ある学校や教育づくりに繋がっていくと良いと思います。

犬童委員が発言してくださったことにより、市民の中に不安を持っていたり、埼玉県の場合も出されましたが、分断的な要素もあるかもしれないと感じられたことからすると、そうではない岩倉市の良さをいかに継承し、それをさらに発展させるかということになると思います。第2期の教育振興基本計画が大きく関わってくると思います。素朴だけでも非常に重要なポイントだと思います。

犬童委員：最後に、ネガティブな話ばかりではなく良いと思ったこともここ数年で2回ありました。1回は私が本当に素晴らしいと感じたことで、3年前に6人ぐらいの小学生全員が人種が違い、男子4人、女子2人ぐらいでランドセルを背負って手を繋いで歩いて帰っているのを見て、とても素敵な絵だと思いました。外国籍の子どもが4人、日本の子どもが2人ぐらいで、肌が白く金髪の子ともブラジル系の子どももいて、普通に交わっていることが良

いと思いました。もう1回は、昨年中学校の文化祭で、日本に来て6～7か月ぐらいの南アジア付近から来た子どもが、たどたどしくも日本語でしっかりと発表をして、日本に来て桜が綺麗で、最初は不安だったけれどまわりの子どもたちが受け入れ関わってくれて嬉しかったことや、夏には母国も好きだけれど日本にずっと住みたいと思っているという内容の発表をして、感動するような発表でした。子どもたちはたくましくて、国籍の垣根を越えていますし、日本に来て学校に行くことで救われて幸せになっています。現場の努力もあると思いますので、最後に伝えさせていただきました。

土屋部会長：国際的な人材が育っているのかもしれませんが。益川委員はいかがでしょうか。

益川委員：今の皆さんの議論を聞いていて本当にその通りだなと思いながら、全国的にもそんなのかもしれませんが、多様性と包摂というところは今後の教育を考える上で大きなキーワードになってくると思いますし、特に岩倉市はそうなると思ったことが1つ目です。外国にルーツを持つ子どもたち、保護者の方についていろいろとお話があって、考えなければならぬ課題は多くあると思いますが、一見するとマイナスに見える部分をプラスに転じて捉えていくという視点が非常に大事だと思います。教育に関して言えばそういうことであり、少子高齢化もそうだと思います。子どもが減って高齢者が増えていることは、活力が下がっているとマイナスに捉えられがちですが、少子高齢化によって経験、知識をたくさん持った高齢者の方やシニアの方が多くいてもっと子どもたちの育ちや学びに積極的に関わるという捉え方をすれば、マイナスをプラスに転じて捉えることが大事だと思います。国際化や高齢化等については、課題として解決していかなければいけないことですが、プラスに転じて捉えて、地域にしながら国際交流ができ、留学とは言わないまでも似たような体験ができることは子どもたちの成長にとって貴重な体験になると思います。一見するとマイナスになることをプラスに転じて捉えていくことが教育にとっては非常に大事なということを思いました。もう一つは、目指す子ども像についての話がありましたが、市全体のものとなるとどうしても通り一辺倒みたいな形になってしまうのかなと思います。他の学校の目指すべき子ども像みたいなところは学校の特徴が出ているということもあると思いますので、岩倉市全体の計画としてそこを想定することは難しいと思いながらも、一方ではそういう姿を目指して何をやるのかということが計画だとも思います。課題を潰していくためにこういうことをやるという計画もあると思いますが、逆にあるべき姿や理想的な姿があり、それに近づけるためにはどうしたらいいかという発想でもっていろいろな取組や事業について考えることはバックキャストと言われる思考性です。どうしても課題解決という方向性があまりにも強いと、犯人捜しのようなものになってしまいます。教育というのは目指すべき価値みたいなものがあってそれに向かってどうしていくのか、それに近づくためにどうしていくのかということは、フォアキャストではなくバックキャストであり、SDGsはまさにその方向性だと思います。そういう思考性を持ってやると考えれば、少し岩倉市なりの目指すべき育成すべ

き子ども像や教育像のようなものが特徴的にいくつか出てくるといいのかなと少し感じながら聞かせていただきました。今の議論を聞いた中での意見です。

土屋部会長：他にありますでしょうか。

益川委員：12 ページの「No.6 小学校への円滑な接続」のところは非常に大事だと思っていて、特別な支援が必要な子どもたちへの対応というところが特に大事だと思いますので、いかに引き継ぎできるかということは大事だと思います。また、私はここではスクールソーシャルワーカーの役割が重要になってくると思いますので、その充実については予算がかかることですので一足飛びにはいけないと思いますが、検討いただけると良いと思いました

13 ページの「No.7 教員の指導力の向上」や「No.8 楽しい授業・わかる授業の実践」について、岩倉市はもちろんですが、日本の学校の先生のレベルはとても高いと思っています、今は多忙化の中でなかなか研修機会を得ることは難しいと感じています。何か研修の学内伝達や研修内容の情報共有のような機会があれば、研修をすべての先生が受けることはできなくても研修内容をうまく伝達し情報共有するような仕組みづくりができたら良いと思います。その意味では研修をする側も少し資料の工夫をしたり、資料だけでもうまく共有できるようなタイプのものにしたりして、研修内容のエッセンスのようなものをまとめて全部の学校に配布する等、せっかく研修をやるのであれば、なるべくたくさんの人に伝わるような工夫をしていただけると忙しい中での力づけに繋がっていくのではないかと思います。

15 ページの「No.13 保護者等と連携した外国にルーツをもつ児童生徒への支援体制」のところで、保護者等と連携したという枕詞がついていることが非常に大事なところだと思います。私も定住志向の方が増えていると思いますので、今後ずっと住み続けることを前提とした就労も見据えた支援ということが必要だと思います。その上では、保護者の方や、場合によっては県内企業、地元企業等との連携についても必要になってくると思いますので、そういった定住志向が増えてくるであろうということを見据えた形での保護者や地域と連携した支援体制について考慮できれば良いと思いました。医療的ケア児はしっかりと支援いただいている良いと思いました。特別な配慮等が必要な子どもたちや外国にルーツを持つ子どもたちを支援する上で、例えば発達検査やWISK等の知能検査は使われていますか。いろいろな課題はあると聞きますが、一方で客観的なデータを取る上で非常に有効だと言われています。WISKは時間やお金もかかるため、やる数は限られてくると思いますので、予算的な措置も含めてやっていただけると良いと思います。ただ、一方で、WISKは外国にルーツを持つ子どもたちには適さないという研究もありますので、そのまま使うことが良いとは限りませんが、発達検査が上手く活用できるような支援体制の整備について入れていただけるとより良い支援が受けられるのではないかと思います。

最後に、学習支援についてテスト前は多くの生徒が参加されていることや、教師を目指している学生もボランティアで入っていて教員養成の一端を担っていることも良いことだと思いました。また、今後地域との連携を岩倉市は進めていくと思いますので、非常勤講師の方や

教員を目指す大学生に加えて、教員OB等の学習支援ができる地域の人材の活用についても少し視野を広げてやっていただけると良いと思いました。

土屋部会長：シルバー人材の活用等でしょうか。

益川委員：地域との連携で地域人材の活用について、高齢化でいろいろな知識や技術を持っている方が多くいらっしゃいますので、そういう方を活用することでその人たちにとっては社会教育や生涯学習の分野から言えば生きがい作りに繋がるため良いと思います。

土屋部会長：シルバー人材と言うと単純な労働のイメージが今はまだ強いですが、活用の仕方としてはもっと高度でいろいろな分野がありそうですね。

教育長：すでに教員OBは入っていて活躍しています。

土屋部会長：次回の学習指導要領改訂で時間数の弾力化をうまく使うことによって、教員研修を充実させ教員の学びを充実させることができるかもしれません。

益川委員：研修主事は位置づけていますか。

教育長：研修だけを担当する主事はいません。校長OBで授業デザインアドバイザーとして雇用しています。

益川委員：位置づけるようにということで進んでいます。そういった役割がついたら、その穴埋めをするために余計に教員が忙しくなるということもあります。

土屋部会長：指導主事が指導主事としての仕事以上に事務職員になっているということもあります。

益川委員：学校内に研修主任のような職種の人はいいますか。主幹教諭のような人が就いたりしていますか。

教育長：主幹教諭は丹波管内では2人います。

益川委員：主幹教諭はいじめや不登校の担当ですか。

教育長：主幹教諭は岩倉市に6年に1回3年間配置されます。3年間岩倉市にいてその後は違う学校にいくため、通常の仕事をすると困りますので、できるだけ特別のプロジェクトみた

いなことをやろうとしています。昨年までいた主幹教諭は不登校対応をやってもらい、ある程度成果が出ました。

益川委員：特殊な業務をつけると、ただでさえ忙しい先生が担当の業務ができず他の人がやらなければならないということもあります。外部で研修ができないため学内研修をするという方向性が強く出ています。

教育長：岩倉市を含めた3市2町で作っている丹波地方教育事務協議会の中では、教科指導員制度というのがあり、教科ごとに2～3人専門的に研修を担当する教員が、それぞれの学校の要請に応じて訪問して授業を見て指導するというシステムがあります。

益川委員：できる限り多くの学校の先生の学びの機会が保障できれば良いと思いますので、先生方が忙しい中でもしっかりと力づけるような体制を考えていただきたいです。

< 基本目標1－3から1－4までについて事務局説明 >

内藤委員：「No.24 平和理解の推進」と「No.25 国際的な視点の育成」について、表現として正しくないかもしれませんが、同じようなものではないかと思います。平和祈念事業は原爆の恐ろしさを知ることですが、国際理解について今年も中学生海外派遣ではモンゴルに行きますが、日本人墓地は是非行って欲しいとお願いしました。そういうところに行って何を思うかだと思います。先日、モンゴル派遣団の6月の研修の際に「どうしてモンゴルに日本人墓地があるの」というテーマを求めました。そういうところから、その答えをインターネットで探したものであったにしても口にする子どもたちが何人もいてくれました。それは国際理解というものが結局は自分を知ることではないかと思います。どちらも共通するものだとことをどこかに表現できたら良いと思います。国際理解はモンゴルのことを知ることだけではなく、生活することだけでもなく、そこで自分自身が日本人として何を思うかということが大事だと思います。また、私は岩倉市に帰って岩倉のまちを大切にしようと思って欲しいということをよく言いますが、その辺が全く別のものにならないように表現できたら良いと思いました。どちらも大事なことで、そこでどう思うかということについて、小学生や中学生なりにこう考えるということで良いと思います。その辺りをうまく盛り込んでいただけると良いと思いますが、いかがでしょうか。

土屋部会長：学校の委託事業は平和と国際と感性を一つにまとめたと思いますが、教育の施策の中で平和理解や国際的なシェアについては、個別に見えるようにしておかないと軽視されたと誤解されてもいけませんので、このように表現することが必要なのかもしれません。ただ、そこがバラバラになっていると子どもの実際の学習とうまく繋がらないかもしれませんので、上手に連携させ意味づけを持たせると良いということですね。

内藤委員：「No.25 国際的な視点の育成」の中に平和について盛り込んでいただければ良いと思います。実際に子どもたちに接してみて、楽しかったという報告は嬉しいですがそれだけで終わってほしくないと思っています。

土屋部会長：日本の平和の大切さについて世界的な視野で自覚できるような学習ループが岩倉市ではあり、今までの積み重ねがあるという前提の中でのご意見だと思います。

犬童委員：長男が昨年モンゴルに行っていますが、帰ってきてすぐではなく後から少しずつ効いてくるものなのかと思います。近所で一緒にモンゴルに行った生徒さんは、帰ってきてとても視野が広がりスイッチが入ったように変わったということですが、息子は時々写真を見たりして楽しかったと言いますがスイッチが切り替わったということではありません。ただ、後から効いてくるのかなと思っています。内藤委員が言われたように、モンゴルで平和や日本との絡みがあることは大切なことであり、楽しかったということで終わってはいけないという視点は大切だと思いました。

内藤委員：帰ってきてからすぐに発表できなくても、2～3年経って後輩たちの話を聞いて思い出すということもあります。今年も壮行会にOB達が入ってくるとと思いますが、その子たちが何を感じていたのかということが見えてきます。

土屋部会長：核になる人には育っていくということになると思います。そういう経験が必ず自分だけのものではなく、他にも広げていくキーパーソンになっていくと思います。

益川委員：幅広い多様な学習活動や教育活動が盛り込まれていて、非常に感心するところが多いです。道徳教育や文化芸術に触れる機会、環境教育、平和理解、国際的な視点と理解、キャリア教育、健康教育、社会情勢に対応した教育、食育等、岩倉市の計画の中には多様な学びの内容が盛り込まれていて改めて感心しています。ただ、先ほど内藤委員が指摘された通り、それぞれ相互に変換し合うところがあると思いますので、この項目としてはもちろん別立てでしっかりと表示していくことが教育内容の見える化という部分でも大事なことはと思いますが、お互い関連し合いながら進められるところが大きいと思います。その辺りを意識しながら、実践的に進めていくことが改めて大事だと感じました。

ライフデザインについても入れていただいています。ライフデザイン教育とは非常に幅広く、ワークライフバランスや金融教育、男女共同参画、場合によってはプレコンセプションケア等も含めての教育だと思います。健康教育にも食育にも関わってきますので、それぞれ項目がありつつ多様なことをやっていることは大変重要であり、岩倉市の大きな特徴であり利点だと思いますが、実際に実践を進める際には、相互に関連させる形で系統性を持って取り組まれると良いということを感じました。

「No.19 児童生徒・保護者への相談体制の整備」のところで、校内教育支援センターができたことはとても良いと思います。岩倉市全体の教育支援センターに行くことは少し敷居が高くても、学校の中に少し気楽に子どもたちが行ける居場所として作られたことは大きいと思います。学校に戻ることでばかりが全てではないとは思いますが、学校側と接点があることは非常に大事だと思います。そういった学校内で気軽に過ごせる居場所作りについては、さらに力を入れて進めていただけると良いと感じました。

「No.23 環境教育の推進」の最後のところに「主体的に取り組む態度や実践力の育成」ということが書かれています。学校教育で知識をたくさん詰め込んでも環境問題の解決にはおそらく繋がらず、行動や意識の変容を促すような教育でないといけないと思いますので、そういった単に量として知識を増やすだけではなく、他の分野においてもそうですが、具体的に行動や意識の変容に繋がるような教育活動というのがさらに推進されると良いと思いました。

給食について 25 ページの「No.31 安全でおいしい魅力ある学校給食の提供」でアンケートを実施されたと書いてありますが、どんな意見が出たのかということは興味があります。こういうことを実施して何か学校給食に反映された部分があるのかということをも、もし可能であればお聞かせいただけると嬉しいです。また、給食費の公費負担のところの検討が今後の方向性になっていますが、国の無償化が始まり残りは自治体で負担するというのが話題になったと思いますが、その辺り特に混乱はなかったのかというところを、差し支えなければ教えていただきたいです。

事務局：昨年度実施したアンケートでは、いろいろなご意見が出ていまして、まだどのように取り組んでいくのかは検討中です。今年度の学校給食応援基金を活用させていただいた給食は始まっており、1 学期最後の給食の日のセレクト給食はいつもとは少しだけ違った形で提供させていただいています。また、今後、皆さんのご意見を聞きながら、いろいろなことに活用していこうと計画をしています。あともう一つは、公費負担の検討ということで、今年度から始まった国の小学校給食費無償化の政策、小学校の負担軽減交付金ですが、小学校の給食費が国の給食費負担軽減交付金の金額で全部賄えるものではありませんので不足する金額については、今年度は市が物価高騰対応重点支援地方創生臨時交付金を活用させていただいて負担しています。このような内容を保護者の方などに周知させていただいて、特に何かご意見をいただいているということはありません。小学校は、国の政策の無償化となるように、今年度から保護者の負担分はいただいています。ただし、中学校に関しては値上げ分については市が公費で負担させていただいて、給食費が値上がっても、保護者の負担は増えていない状況です。中学校も無償化の声がありますが、国の方がまだ小学校分しか負担軽減交付金を実施していないので、中学校も無償化にというのがなかなか難しいので、値上げ分は物価高騰対応重点支援地方創生臨時交付金を活用して保護者の負担を増やさないようにしている状況です。

犬童委員：朝食を毎日食べている児童生徒が減っていることが気になっています。2日前に中学校の保健委員会に1時間ほど参加させていただきましたが、スマートフォンを利用している時間と睡眠時間について、岩倉中学校の分母が750人ぐらいだったと思いますが、寝る時間は思っていたよりも全体的に1時間ぐらい遅く、午前零時から午前1時に寝ている子が100人、午前1時以降が50人でした。日付が変わってから寝ている子が150人で16～17%だという話でしたが、結局、朝食を食べていないということは前日の夜ふかしがあつて、朝起きられなくて食べられていないと感じました。スマートフォンが最近では弟や妹の小学生の方に移行しているということが中学生の分析であり、中学生は直近では1%しか減っていませんが、小学生は3%減っています。全く関係なさそうな2つですが、スマートフォンが生活に入ってきている時間と朝食欠食の児童生徒の割合ということは、ある程度関係しているのかなと感じ、数字が下がっていく一方で心配だと思っています。

土屋部会長：委員の皆様の意見を聞きながら思いましたが、ここにどのように表現させるかは難しいですが、点検評価でどうしても教育委員会の文書なので仕方ないですが、子どもがどう思っているのかということや子どもに聞いたらこういう状況が分かってきた等、子どもたちの意見や子どもたちの姿がもう少し出てくることも必要だと感じました。今後探究的な活動や学習はさらに重視されると思いますので、食育や平和、国際等の学習活動が探究的に学ばれて、全員が同じことをやる必要はなく、食育をやる子どもや平和をやる子どもがいてもいいと思いますが、それらが関係しているというところがあるといいと思います。そのような学習デザインを授業デザイン研究会が、個々の授業のデザインだけではなく、子どもが何かをやるかという探求としての学習活動全体のデザインをやっていただき、それが点検評価の中にあつたら良いと思います。子どもが受身側の存在ではなく、岩倉市の子ども条例に沿う主体的な子どもの姿として、教育委員会が子どもたちを登場させ、意見表明を保障するということができれば素晴らしいと思います。これだけ多くのことが具体例をもって書かれていますので、岩倉市であれば子どもの声や意見等を聞き、それを踏まえた施策を考えられると思います。委員の皆様の意見を聞きながら、繋がりやいろいろなことが盛り込まれているところで、少しでも子どもの姿を入れ込むとより具体化するという印象を受けました。学校や先生がやるのではなく子どもがやるという発想で施策を見直したときに、次の施策はどのように評価されていくのかということだと思います。子どもの意見表明の場を作り、施策の中で最も心に残っていることやこれから岩倉市がやらなければならないこと、給食についての意見等を言ってもらった上で政策に取り込むということが、今後の課題としてあると思います。

益川委員：前回から申し上げている通りパブリックコメントまでいかなくても、この計画を作ると同時に子どもたちの意見を取り入れてくださいということで、いろいろと工夫していただいていると伺っていますので、素晴らしいと思いながら聞かせていただきました。今、土屋部会長が言われた通り、実は評価するときに子どもは入ってこないのかという議論は他の

ところでもあります。先ほど言われたように評価委員の中に子どもたちが入っていることもありますし、別で会議をする等どういった形態をとるのかはわかりませんが、子ども自身が意見を表明して計画を作ったのであれば評価する場合も子どもが入っていた方が良いという議論はいろいろなところで言われ始めています。ぜひ最初に計画を作る際に子どもの意見を聞くということとともに、しっかりと計画通り進んでいるか、子どもたちの意見が本当に反映されたものになっていたのかという評価の部分に子どもの声が反映されていくと良いと思います。なかなか難しいとは思いますが、そういったことを見据えていくことは大事だと思います。

< 基本目標 1－5 から 1－6 までについて事務局説明 >

犬童委員：昨日隣の市で小学校 1 年生の子が登校時に交通事故で亡くなるという事故があり、息子が通学団の班長をしています。学期末ということもあり通学団集会が学校でありました。息子の話では、4～5 月は通学団についてきていた子どもが、最近になってついてこなくなったということでした。加えて昨日の交通事故もあって、私も今日は旗当番だったということもあり、交通安全について昨日から考えています。今朝、朝食の時に子どもの話を聞いたときに思ったことは、班長という役割を 4 月から任されていて、それなりに学校の先生から指導されているとは思いますが、上級生から見て盗んで何となく旗を出しているだけで、しっかりやっている感じがしない子どももいると思います。ただ儀礼的にやっていて、慣れてくると危ないという部分もありますので、見守りやシルバーの人が立っていて保護者の旗当番もあります。もう少し交通安全という部分で、通学団の班長や 4 年生ぐらいの高学年から少しずつ意識を醸成していけると良いと思いました。息子は 5 年生まで何もやっていなかったところに 6 年生で突然役割をもたされて戸惑っていましたので、狭いテーマかもしれませんが発言させていただきました。

土屋部会長：話し合っただけで決める場面がもう少し必要なのかということですね。やるように言われたから、前の人がやっているからという感じになってしまっている可能性もあり、先生に言われたからという形ではない途中の点検ができるかということですね。

犬童委員：今は下に行けば行くほど普通は子どもが減っていきますが、岩倉市はありがたいことに小学生は横ばいで、通学団によっては低学年がとて多くて 5、6 年生が少ないということもあります。低学年の子でもしっかりしている子どもはいますが、例えば毛虫を触って急に泣き出したり、少し手を焼くような話も聞いたりはしました。今、学校生活で一番命が危ない場面については、登下校時、特に登校時だと思いますので、No.40「地域との協働による安全な教育環境づくり」と絡むところだと思います。

土屋部会長：通学路の安全点検について、子どもが通学路を自分事として捉えて見直し、どのように学び合っているかということですね。

犬童委員：付け加えると、中学生の自転車についても気になっています。今年から法律が厳しくなり、守れている子どももいれば、警察がいないところで危ない運転をしている子どももいる気がします。私も含めてですが、どこまで左側を走らなければいけないのか等、分からないところもあります。あと、高架でスピードを出して下っている自転車がいて怖いと感じることも日常であり、私自身も敏感になっています。

土屋部会長：地域協働の中で子どもの主体性をどのように活かしながら、守る方であり守られる方でもある子どもたちが、自分自身の問題として地域の交通安全について考えることが大事だと思います。

内藤委員：「No41 学校施設の安全性・機能性の向上」の課題のところで、岩倉東小学校と五条川小学校で多様化する児童生徒に対応するため新たに多目的トイレの設置とありますが、イスラムのことが入りますか。

事務局：ジェンダーなど多様化する児童生徒への対応です。学校施設が避難所になっているということもあります。

内藤委員：イスラムの人たちのトイレの使い方は特殊で、紙を使わず水ですべて流します。マナーや習慣が違います。

土屋部会長：それが必要な部分かもしれません。内藤委員のご指摘は、今後イスラムの人が増えて同じような指摘が出てくる可能性があります。

土屋部会長：他にはいかがでしょうか。

益川委員：まず1点目ですが、教育体制の整備について今まで1-1から1-4までいろいろな教育活動、特に学校教育を進める際の体制整備の部分があり、家庭、地域、学校関係機関との連携というところが非常に大事になると思います。コミュニティ・スクールも進んでいて、岩倉市では順調に関係機関や地域、家庭との連携も進んでいますが、さらにいじめや不登校等の社会問題行動の早期発見、適切な対応という意味でも、学校、家庭、地域の情報共有は大事になってくると思います。先ほどから話題に出ている朝食を食べない子どもや家庭での生活の状況等、地域や家庭としっかりと情報共有をしていかないと適切な対応はできないと思います。次期計画でも教育体制の整備のところは是非強化するということを入れていけると良いと思います。

2点目は、地域との連携によって見守り隊の方や大人が子どものために活動をしています、子どもたちの安全確保や育ちに地域の人に関わっていることが地域の人にとっては、自分の幸せや喜びなどの生きがいになったり、自己実現になったりというエピソードがいくつかあると非常に良いと思いました。評価に入れるかどうかは別ですし、後半の生涯学習の分野の話になるかもしれませんが、学校における教育体制の整備は子どもたちのためでもあり、実はそれに関わる地域の人たちの自己実現や生きがい作りにも繋がっているということがありと良いと感じました。

3点目ですが、先ほどの成果指標で、人の役に立つ人間になりたいと思う児童生徒の割合が17ページの「1-3 豊かな心・たくましい体の育成」というところであったと思いますが、確か全国学力・学習状況調査の中で社会を良くするために何かしたいと思いますかという質問項目があったと思います。地域との連携で地域の人と一緒に何か活動をすることによって、地域への想いや愛着が生まれてくると考えられるのであれば、是非そういった「社会を良くするために何かしたいと思いますか」という項目についても、計画の成果の一つとして追っていくという視点があっても良いと思いました。

土屋部会長：先ほどのトイレの話で、災害時の避難所として多目的トイレの改修ということが「No.41 学校施設の安全性・機能性の向上」で述べられていますが、「No.42 学校施設の再整備」の今後の課題・方向性の中で、長寿命化計画に基づきということだけではなく、コミュニティ・スクールや防災機能の面からも新たな課題が出てきていると思います。施策を進めていくときに、部屋や設備、環境についての要望等コミュニティスクールの機能強化のために学校施設を再整備する可能性もあります。コミュニティスクール化するという視点での点検評価をし、そこで必要な施設整備も加えていくということも盛り込んでいく必要があると思います。是非学校がそういった新しい機能を盛り込むということでもう一度見直していただきたいと思います。

土屋部会長：これでひと通り終わりましたが、全体を通していかがでしょうか。

益川委員：詳細に非常に分かりやすくまとめていただき、実績や今抱えている課題、今後の方向性も明確になり毎年感心しています。報告書もとても良い報告書で、良い取り組みをされている証だと改めて感じました。岩倉市教育委員会として教育振興基本計画をしっかりと進捗し発展的にやろうとしていることに対しては、おそらく他の委員さんも同様の評価だと思いますので、非常に良い取り組みをされているしさらにこれを発展させるべくいろいろなことを考えています。良い形で評価と改善のサイクルが回っているということを共有させていただきたいです。

土屋部会長：是非教育委員の会議や議会への説明の中で、評価委員会でかなり良い評価を得たということを伝えてください。

教育長：いつも格調高いコメントをいただき、胸を張って出しています。

益川委員：ストレートに取組が良いという評価だと思います。

土屋部会長：これで令和7年度の点検評価報告書につきましての審議は終了になります。事務局の方にお返しします。

7 その他

事務局：それではこれをもちまして第2回目の評価部会を終了させていただきます。2日間にわたり評価をしていただきましてありがとうございました。

8 閉会